

子供の病気

2012年06月10日版



内科・小児科・皮膚科・整形外科・メンタルケア

あおばファミリークリニック

〒341-0044 埼玉県三郷市戸ヶ崎 2-286-1

TEL:048-955-8621 FAX:048-956-0648

<http://www.aoba-fc.jp>

お子さんが日頃、病院にかかる頻度が最も高いのは、かぜを含めた感染症です。感染症は様々なものがありますが、お母さん方も病状を知っておけば、あわてないで対処できることも少なくありません。クリニックで個々の病気としてお渡ししていた病状説明の内容を、新しい話題も合わせて感染症全般としてまとめてみました。ご自宅にこの冊子を置いて、お子さんが病気にかかった時にまず開いてみて下さい。

各項目の病気の前においた写真は「Atlas of Pediatric Physical Diagnosis」から借用しました。

伝染病にかかったら、学校・幼稚園・保育園では病気の種類によって決まった時期は休まなければなりませんし、届出が必要になってきますのでご注意下さい。出席停止期間が一部の病気ではH24年4月から変わりましたので加筆します。

学校伝染病

3種類に分類され、第1種は法定伝染病といいコレラや赤痢など本当に危ない伝染病が入っており、普通の生活でかかることはありません。

第2種は法定伝染病以外のやや重い9種類の伝染病です。主なものの病名と登園(校)が可能になる時期をあけておきます。

インフルエンザ：発熱した後5日を経過し、下熱して2日たってから(幼稚園・保育園児は下熱して3日たってから)

流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)：耳下腺(顎下腺・舌下腺)の腫れが出現してから5日を経過し、腫れが引いてから

水痘(みずぼうそう)：すべての発疹がかさぶたになってから

麻疹(はしか)：下熱して3日たってから

百日咳：特有の咳が消えるまで、または5日間の適正な抗菌剤療法が終わるまで

咽頭結膜熱(プール熱)：主要症状が消えて2日たってから

第3種は軽いものを含めて様々なものがあります。治癒するまで出席停止とありますが、不顕性感染(かかっているけど症状が出ない、または軽くすむ)が多いため、かかったお子さんだけが休んでも防疫上はあまり意味がありません。症状が強い期間は休むことで良いでしょう。主なものの病名をあけておきます。

流行性角結膜炎(はやりめ)、ヘルパンギーナ、手足口病、伝染性紅斑(りんご病)、溶連菌感染症、感染性胃腸炎、マイコプラズマ肺炎、伝染性膿痂疹(とびひ)、伝染性軟属腫(みずいぼ)

以下は次の順で感染症の病気についてお話します。

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1) 流行性耳下腺炎(おたふくかぜ) | 13) 乳児白色下痢症 |
| 2) 水痘(みずぼうそう) | 14) マイコプラズマ肺炎 |
| 3) 溶連菌感染症 | 15) 百日咳 |
| 4) 咽頭結膜熱(プール熱) | 16) 伝染性膿痂疹(とびひ) |
| 5) ヘルパンギーナ | 17) インフルエンザ |
| 6) 手足口病 | 18) 麻疹(はしか) |
| 7) 伝染性紅斑(りんご病) | 19) 風疹 |
| 8) 突発性発疹(突発疹、とっぱつしん) | 20) 尿路感染症 |
| 9) 髄膜炎 | 21) 亀頭包皮炎 |
| 10) 帯状疱疹 | 22) 川崎病(皮膚粘膜リンパ節症候群) |
| 11) ヘルペス性歯肉口内炎 | 23) ぎょう虫症 |
| 12) 伝染性単核症 | |

(1)流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）



おたふくウイルスの飛沫感染によっておきます。潜伏期間は14～21日。感染力はかなりありますが、はしかや水ぼうそうほどではありません。4歳から8歳までにうつることが多く、この時期ならば順調に治る場合がほとんどです。8歳以上になると重くなることがあります。耳下腺が前触れなしに腫れます。発熱・頭痛・食欲不振などの症状の後に腫れることもあります。耳たぶの下からあごの方にかけて腫れ、境目ははっきりしません。顎下腺や舌下腺も腫れることがあります。両側とも腫れる場合がほぼ半数です。片方だけでも免疫ができますから、後になってもう一方の「おたふくかぜ」になることはありません。しかし数日ずれて反対側の耳下腺が腫れる場合がたまにみられます。この腫れは押すと痛み、口を開けたり物をかむとさらに痛みます。発病してから2～3日目がピークで5～7日ですでに引きます。熱が出るとは限りませんが、出た場合には2、3日続くこともあります。

髄膜炎や脳炎が他のウイルス感染症よりずっと起きやすい点が重要で、熱が続いて頭痛・嘔吐が起きた時には要注意です。進行すればけいれん・意識障害が起きます。また思春期以後の男子に精巣炎（こうがん炎）を起こすことがあります。不妊症になると長い間信じられていましたが、通常は片側なので不妊になることはまれとのことです。また、まれに難聴をおこすことがあり難治性です。耳下腺（顎下腺・舌下腺）の腫れが出現してから5日を経過し、耳の下の腫れが引けば登園（校）ができます。

病院では熱や痛みをおさえる薬を処方します。

腫れがひどく熱のある間は安静にして下さい。冷やすと痛みが和らぎます。力を入れてかむと痛みが増しますので、すぐに飲み込むことのできる食品が適しています。また唾液の分泌を促す高蛋白質の食品や酸味の強いもの、また刺激物は避けた方が良いでしょう。

(2)水痘（みずぼうそう）

水痘・帯状疱疹ウイルスによる伝染病です。かぜと同じで飛沫感染します。感染力が強く、幼稚園・学校ではもちろんのこと、人ごみの中で感染することも珍しくありません。家庭内ではまだかかっていない人の約90%がうつります。母親からの免疫が移行しにくいので新生児でもかかります。



潜伏期は14日。米粒から小豆大の赤い発疹が胸や腹に突然現れます。熱も数日出る場合があります。発疹はいっぺんには出ずにいろいろな段階が混在し、腹・胸・背中から手足へ広がります。しだいにもりあがり、水疱になってまもなくつぶれ、かさぶたを作ってほぼ1週間で治ります。全部の発疹がかさぶたになれば登園（校）できます。学校伝染病に指定されています。合併症としては脳炎・髄膜炎などがあり、意識障害・けいれん・嘔吐などがおきた場合には入院が必要になります。病院ではのみ薬と軟膏をお出しします。症状が軽い場合にはかゆみ止めの抗アレルギー剤と軟膏のみですが、症状の強い時は抗ウイルス剤をのみます。しかし乳児では薬の副作用を考えて、抗ウイルス剤は使わないことがあります。軟膏は上から発疹を押さえるような感じでつけて下さい。1日に何回でも、また前につけた部分に重ねてかまいません。

他の子にうつさないように完治するまでは原則として外出しないで下さい。感染力は発疹が出た日とその前日が特に強く、かさぶたが乾くまであります。

アスピリン系の解熱剤（バファリンなど）は危険ですので、市販の解熱剤を使う場合にはご注意ください。

(3) 溶連菌感染症

溶連菌が原因で発熱と発疹が出る感染症です。溶連菌とは溶血性連鎖球菌の略で、血液を溶かす毒素をもち、鎖状に一系列に並ぶ習性のある球状の細菌という意味です。

突然に熱が出て、のどの痛みを訴えます。吐いたり、おなかが痛くなる場合もあります。発熱から1～3日たって細かい発疹が時には全身、多くの場合は下

腹・手足に出て、かゆみを訴えます。扁桃腺は腫れて膿（うみ）が出ることがあります。舌が赤くブツブツして、イチゴに似ている状態になることがあります、莓舌と呼ばれます。

初期に適切な抗生物質をのめば、1～2日で熱は下がり、登園（校）できるようになります。しかし完全によくまで薬をきちんとおまかせ下さい。小さいご兄弟がいらっしゃる場合には、家庭内での感染を防ぐために、予防薬をのんで頂くことがあります。

気をつけなければならないのは回復期におきる腎炎とアレルギー性紫斑病です。一見なおったように見える頃、頭痛や食欲不振、むくみ、血尿などがおきた場合には腎炎の疑いがあります。また下腿に出血斑が出ればアレルギー性紫斑病の可能性があり、この時もまた腎炎をおこす恐れがあります。このような症状がなくても早期発見のために、尿の検査を受けて頂きます。治ってから2週間から1ヶ月あとの検査をしますので、お渡しする容器に朝起床時の尿をとってお持ち頂き、窓口にお出し下さい。この時はご家族の方どなたでも結構で、患者さんがいらっしゃる必要はありません。すぐに検査結果が出ますので様子をお話します。



いちご舌

(4) 咽頭結膜熱（プール熱）

夏にプールを介して学童の間に流行するのでプール熱と呼ばれます。プールに入らなくても通常のかぜと同じで飛沫感染でもうつります。アデノウイルスが原因です。

5～7日の潜伏期の後に39度以上の急な発熱が3～5日続きます。扁桃腺が腫れて、のどの痛みが強く、目も赤くなります。頭痛や吐き気なども出ることがあります。して結膜炎が同時に出ない場合には、何日かたたないと診断できないこともあります。病院では熱やのどの痛みをおさえる薬をお出しします。目には抗生物質やステロイドの点眼薬を使うこともあります。



扁桃腺の腫れ



結膜の発赤

かし熱が先に出

(5) ヘルパンギーナ

夏かぜの一種です。コクサッキーA群ウイルスが原因です。乳幼児がかかりやすく、口腔内粘膜に小さい水疱をつくるのが特徴です。飛沫による感染と便からの感染の二経路があり、かなり長い間伝染力があります。突然に熱が出て2～3日は下がりません。また咳・鼻水はほとんどみられません。口蓋垂（のどちんこ）の根元に小さな水疱ができ、まもなく破れてアフタ（浅い潰瘍）になります。のみ込む時に痛みがあり食欲はあっても物を食べたがりませんので、なるべく口当たりの良い食事にして下さい。

病院では熱やのどの痛みをおさえる薬をお出しします。

感染力は強いので、2～4日の潜伏期の後に兄弟のどなたかが熱を出せば、同じ病気の可能性があります。ひと夏のうちに2回かかる場合もみられます。



(6)手足口病

手・足・口などに発疹ができるので、この名前がついています。コクサッキーA16型、エンテロ71型、コクサッキーA10型など複数のウイルスが原因になります。

潜伏期は3～7日。手足に発疹が出て感染に気づきます。発疹は小さな水ぶくれ（水疱）で、手・足・膝・肘あるいはお尻に出ます。手・足・口の全部に出るとは限りません。口の中にはアフタ様の粘膜疹ができて痛み、よだれが多くなり食べたがらなくなります。熱は微熱程度で年少者に多く、1～2日で平熱となります。2011年に流行したものは発疹が大きく、手・足・口だけでなく全身に発疹が出たりしたので水痘やとびひと区別が付きにくいものでした。病院では、熱やのどの痛みがあれば、その薬を処方します。

のどが痛くて食べられない時には、口当たりの良い食品、つまり、軟らかく、熱くなく、味の薄いものを与えます。冷たいものは楽なようで、冷やした牛乳、ヨーグルト、アイスクリームなどはなんとか食べられるようです。脱水症にならないよう、水分の補給には気をつけて下さい。



(7)伝染性紅斑（りんご病）

正式名称は伝染性紅斑と言います。両方のほっぺタがりんごのように赤くなるのでりんご病と呼ばれています。太ももや腕に赤い斑点やまだら模様ができます。熱は出ませんが、頬がほてったり少しかゆくなることがあります。一応はうつります（伝染性）が、伝染力は弱いですし、頬が赤くなった時にはすでにうつす時期を過ぎています。感染しても発病しない子もたくさんおり（感染しても頬が赤くならない子がいる）、この病気にかかっても登園（校）はできます。しかし頬があまり赤いなら1～2日は休む方が良いでしょう。日焼けすると赤みが強くなる場合がありますので、長袖を着たり、外遊びを控えるなど注意しましょう。自然に治りますが、かゆみ強い時はかゆみ止めを処方します。



両頬の発赤



手足の発疹

(8)突発性発疹（突発疹、とっぱつしん）

生まれて初めて高い熱を出したら、この病気の可能性があります。4ヶ月から1歳までの小児がかかりますが、生後2ヶ月未満や2歳以上ではまれで、生後6ヶ月ごろに最もかかりやすくなります。たいていは一生に1回だけ。熱の最初の日には診断をつけるのはまず不可能で、2日目には口腔内の所見から発疹の出現を予測できることもあります。

かかり始めは突然に熱が出ます。39度を越えてしまうこともしばしばですが、高熱の割には元気です。せきや鼻水はない場合が多く、あっても軽度です。時には下痢・嘔吐・食欲不振や不機嫌になることがあります。熱は通常はまる3日間続き、下がる途中か、下がってから発疹が出れば診断が確定します。淡紅色のこまかい発疹が主に体幹に出て、多ければ顔・首・手足にまで広がります。2日か長くても3日で消えます。

熱のある間は静かにさせて、水分を十分に与えて下さい。病院では不機嫌な症状に対して安定剤などのシロップを処方します。38.5度以上の高熱で不機嫌な場合は解熱の坐薬を使って構いません。発疹は通常はかゆみも軽いため治療は必要ありません。

なお熱が3日間続くことから風疹の呼称の「三日ばしか」と混同される場合がありますが、全く別の病気です。



(9)髄膜炎

脳や脊髄の表面を覆っている髄膜にウイルスや細菌が感染して発症します。新生児や乳児に多くみられますが成人でもおこり、それぞれ起因菌が異なります。新生児期には B 型連鎖球菌・大腸菌・リステリア、乳児期から幼児期にはインフルエンザ桿菌 b 型 (Hib)・肺炎球菌が原因菌であり、髄膜炎菌 (ナイセリア) は全ての年齢で関与します。ウイルス感染では無菌性髄膜炎と呼び、熱は出ますが 1 週間ぐらいで治癒して後遺症はほとんどみられません。細菌による化膿性髄膜炎では、かぜ様の軽い症状から始まり、全身状態が急速に悪化し、高熱・頭痛をきたし、けいれん・意識障害・嘔吐などをおこします。髄膜炎が疑われれば基本的には入院が必要であり、腰椎穿刺で髄液を採取して診断をつけます。症状に応じて輸液や抗生剤で治療しますが、化膿性髄膜炎では 3 割が死亡し後遺症も 30% 近くに残る怖い病気です。2008 年 12 月から Hib ワクチン、さらに肺炎球菌ワクチン (プレベナ) の予防接種ができるようになり、今後は子供の髄膜炎の発症抑制が期待されている。

(10)帯状疱疹

水痘 (みずぼうそう) に一度かかったことのある子 (大人も) が、何年かたって再発したものです。水痘ウイルスが原因で、最初にかかった水痘のあとにからだの中で生き残ったウイルスが再び活動して症状を出します。水痘では全身に発疹が出ますが、この病気では一部の神経に沿って発症し、左右のからだの片側にだけ発疹が出ます。他の人からうつったのではありませんが、他の人にうつります。うつされた人は水痘として発症します。

小さなブツブツが一部の神経に沿って出てきます。例えば肋間神経に沿って、片側の胸から背中にかけて横に帯状に発疹が広がります。大人はとても痛がり、皮膚症状が治ってから痛みが続きます (帯状疱疹後疼痛) が、子供はあまり痛がりません。痛みがゆいと訴えることはあります。1 週間ぐらいでかさぶたになって治ります。病院では痛み止めと軟膏をお出しします。抗ウイルス剤を使うこともあります。



胸にできた発疹

(11)ヘルペス性歯肉口内炎

単純ヘルペスウイルス (I 型) が原因です。6 ヶ月～3 歳頃にかかります。初感染で症状が出るものは一部ですが、そのうちで歯肉口内炎は口唇ヘルペスと並んでヘルペスウイルス感染の大部分をしめます。

38 度以上の高熱 (しばしば 39 度以上) が続きます。歯肉が赤く腫れて出血することがあります。口の内や舌に水疱ができ、すぐに水疱は破れて白いくぼみ (アフタ) になります。口の中の痛みが強く、よだれが出て食欲が落ちます。治るまで 10 日前後かかります。

病院では痛み止めと解熱剤をお出しします。経口摂取できなければ点滴が必要になることもあります。

けいれんや意識がないなどの症状はヘルペス脳炎が考えられますので、救急車で入院が必要になります。



(12)伝染性単核症

EBウイルスが原因であり、なかなか下がらない発熱に対しての検査をしてようやく判明するような特殊な感染症です。日本では幼児～20歳前後の若者の7割ほどが感染し、症状が出ないまま終わることが多いようです。EBウイルスへの初感染で病気は発症します。昔はテニスの松岡修造選手（現スポーツ解説者）もかかり一時プレーができませんでした。

潜伏期間は2～8週。38度以上の発熱、だるさ、頸部リンパ節腫大、のどの痛みが主症状で、熱は1～3週続きます。肝臓が腫れて、採血で肝機能異常すなわちGOT・GPTの値が高くなります。血液中で白血球も増加し、その内の単核球というものが特に増えるので、単核（球）症と呼ばれます。

特効薬はなく、病院では解熱剤をお出しします。肝機能が悪ければ肝臓を保護する薬をのむこともあります。

(13)乳児白色下痢症（冬季下痢症）

毎年寒くなるとはやる下痢があります。冬季におき、乳児がかかりやすく、便が白くなることから、冬季・乳児・白色便性ということばが頭につく下痢症の呼び名になります。嘔吐もみられる場合は嘔吐下痢症（はきくだし）と呼ぶこともあります。初めての冬を越す赤ちゃんが最もかかりやすく、2回目の冬を越す幼児までが主にかかります。それ以上の小児がかかっても普通の下痢で便が白くなることはまずありません。ロタウイルスが原因です。いくつかのタイプがあるために一冬に2回かかることもあります。



おむつについた白色便

まず下痢と嘔吐で始まりますが、必ずしも同時におきるわけではなく、嘔吐があるとは限りません。熱の出ることもあり、他にせきや鼻水のような症状が出ることもあります。特徴的なのは便がだんだん白っぽくなっていくことです。最初の便は普通の消化不良症の便と区別が付きませんが、2～3日すると黄色くなり、しだいにその色も薄くなって、典型的な例ならば真っ白な下痢便となります。下痢は治りにくく、治療を受けてもたいてい1週間かかります。

病院でお出しする薬は症状に合わせて、整腸剤・下痢止め・吐き気止めなどです。下痢を急に止めると腸管にガスがたまり腹痛をきたしますので、下痢止めは弱いものから始めます。要注意なのは脱水症で、嘔吐が続くと急激に具合が悪くなりますので、すぐに止める必要があります。吐き気止めの坐薬、皮下注射やさらには点滴が必要になる場合もあります。しかし機嫌が良く食欲もある程度良ければ、下痢にはあまり神経質にならず、水分をいつもより多めに与えて脱水症を防いで下さい。解熱剤は使ってもかまいません。

食事は消化の良いものにして下さい。食欲のない時は無理じいせず、一日ぐらい絶食にした方がかえって治りが早いこともあります。牛乳はやめて粉ミルクにした方が良いでしょう。のみが悪い時には粉ミルク缶に書いてある濃度の4分の3にして下さい。下痢が続いても悪化しなければ、便をよく観察しながら食事内容を変えて下さい。慎重になりすぎていつまでも流動食にしていると便が固くなってきません。

なお下痢の状態に合わせて処方しますので、便は受診のたびにおむつのままでお持ち下さい。

(14)マイコプラズマ肺炎

マイコプラズマという特殊な病原体による感染症です。いつもよりかぜが治りにくい時にはこの病気の可能性があります。レントゲン写真で胸に影がうつりますので肺炎の一種ですが、普通の肺炎とは違うという意味で異型肺炎とも言います。普通の肺炎に比べて症状の進みぐあいが緩やかです。

5～9歳の幼児に好発しますが、2歳以下の乳幼児でもおこります。2011年には大流行し、天皇陛下も感染したことで注目されました。

熱と咳で始まり、レントゲン撮影や血液検査をしない限りかぜとの区別はつきません。最初は熱だけで咳のみられないこともありますし、また熱がなくがんこな咳だけのこともあります。

普通のかぜとは違うので、一般的な抗生剤やかぜ薬を使っても一向に症状が良くなりません。病院では咳止めと特殊な抗生物質（クラリス・ジスロマック・ミノマイシンなど）をお出しします。感染力は強くありませんが、家族内で同様の咳をしていたら、この感染症の可能性が高くなります。



レントゲンの肺炎像

(15)百日咳

百日咳菌によっておこり、呼吸が止まりそうなほどひどい咳き込みをおこします。三種混合（DPT）の予防接種を受けてない子がかかかりますが、最近では大人もかかっている頻度が高いことが問題になっています。潜伏期間は7～10日です。母親からの免疫が期待できないため、乳児期早期からかかります。そのためにこの時期からワクチン接種を始めます。

最初は鼻水などもあり普通のかぜと変わりありませんが、しだいに咳が多くなり、顔を真っ赤にして激しく咳き込むようになります。1～2週目頃が最も咳がひどい時で、特に夜間に強く、咳による嘔吐や口唇チアノーゼもみられるようになります。3～4週目頃になると少しずつ軽くなってきます。一般に熱は出ませんが出れば要注意です。特に生後6ヶ月以下では重症化して入院が必要になることがあります。

病院では有効な抗生剤と咳止めをお出しします。

咳き込んで吐く場合は、消化の良い食事にして、1回量は少なく、回数を多くします。

予防接種をしていれば、かかることはほとんどなくなりますので、生後3ヶ月を過ぎたら必ず受けましょう。



(16)伝染性膿痂疹（とびひ）

正式名称は伝染性膿痂疹と言いますが、次々にうつっていく（伝染性）うみ（膿）やかさぶた（痂皮）のできる発疹のことであり、一般に「とびひ」と呼ばれています。主に黄色ぶどう球菌、または連鎖球菌による皮膚感染症で夏に多くみられます。

全身のどこにでもできますが、顔面とくに鼻の周辺、体幹、四肢の順に多くみられます。生後まもなく鼻腔には細菌がつきはじめるので、鼻をほじるとそれがとびひの原因になることが多いのです。えんどう豆大の水疱が次々にでき、水疱の膜が薄いのですぐに破けて中にある細菌が他の場所にうつります。びらん（ただれ）の状態からかさぶたができて治ります。夏の直射日光で弱った皮膚は感染に対する抵抗力が落ちており、特に夏の終わりから秋の始めにかけて多くみられます。またアトピー性皮膚炎・あせも・虫刺されなどがあると細菌が付きやすい状態になっています。

病院では抗生物質の飲み薬をお出しします。かゆみ止めも加える場合もあります。限局している時



には軟膏だけのこともあります。

よほど広範囲でない限り入浴してよく洗います。細菌は46度くらいまで生きており風呂の温度では死にませんので、他の兄弟より後に入浴させる配慮が必要です。湯上りにはとびひの箇所はタオルでこすらずにティッシュペーパーでたたくようにふいて下さい。とびひは乾かした方が早く治ります。しかしかゆくて搔いていますと広げてしまいますので、場合によっては包帯をすることもあります。この時も入浴はさせて、その後の手当てを十分にして下さい。水疱やただれのある時には幼稚園や学校でのプールに入れないこともあります。

(17)インフルエンザ

インフルエンザウイルスが鼻や口から侵入して上気道粘膜に感染して発症します。潜伏期は1～3日と非常に短く、あっという間に広がります。感染力が強く、冬になると毎年流行を繰り返し、老人ホームなどに入っているお年寄りがインフルエンザが悪化して肺炎で亡くなることなどでも問題になっています。38度以上の発熱・だるさ・関節痛、咳・鼻水の呼吸器症状、腹痛・下痢の腹部症状で発症します。数日で下熱しますが、1週間以上も咳や全身違和感が続きます。乳幼児では中耳炎・熱性けいれんや肺炎までおこすことがあります。

高熱ならば安静にして休養をとりましょう。他へ広げないために幼稚園や学校はお休みが必要です。食欲がなくても水分は十分にとりましょう。

病院では検査をしてインフルエンザ陽性ならば薬をお出しします。鼻腔粘膜のぬぐい液をとって検査します。発症後6時間以上たたないと、かかっているにもかかわらず検査で陽性に出ない可能性があります。感染といっても細菌によるものではないので抗生物質は効かず、以前は咳止め・解熱剤などの対症療法しかできませんでした。抗ウイルス剤が開発されてからは早期投与で症状が軽くなり、短期間で治るようになりました。しかし、この薬の副作用が問題になっています。この薬は4種類しかありませんが、最も使いやすいタミフルという薬をのんだ10歳代の子供達が異常行動をおこして窓から飛び降りて死んでしまう事故がおきました。状況によってタミフル、またはリレンザ・イナビルという吸入薬（のみ薬ではありません）をお出しします。病状によっては抗ウイルス薬の注射を使うこともあります。

インフルエンザにかかってあわてないためには予防接種を受けておくことをおすすめします。はしか流行時にはしかワクチンが足りなくなってしまうように、インフルエンザ予防接種も同じ状況にならないとも限りませんので、クリニックではワクチンを早めに十分準備しておくことにしています。予防接種でも発熱や頭痛などの副作用もありますので、注射した後も十分な注意が必要です。注射は2回受ける方が確実ですが、大人は1回でも十分に免疫はつくようです。しかし12歳以下の子供は2回受けた方が良いでしょう。

予防接種以外に、うがい・手洗い・マスク、十分な休養と栄養補給もこの病気の予防に重要です。



(18)麻疹（はしか）

07年からこの感染症が20歳前後の大人を中心に大流行して新聞をにぎわせていますが、本来は春にかかる病気で、この10年間は発生件数は非常に少ないものでした。

麻疹ウイルスが原因でかかります。一度かかると体内に抗体がつけられるので（「免疫がつく」と言います）、普通は二度とかかりません。潜伏期（うつってから発病するまでの期間）は約10日間で、この間は全く症状が出ません。はじめは熱・咳・くしゃみ・鼻水・目やにが出て、のどが赤くなる程度で普通のかぜとの区別が付きません。一時的に熱が下がる頃、頬粘膜に白い斑点（コプリック斑）が出て、発疹が出る前に診断がつく場合もあります。この後に再び熱が上がり、それと同時に発疹が現れます。まず頸部・顔面に出始め、その日のうちに胸に広がります。出始め



コプリック斑



全身の発疹

の発疹はごく小さく、あせもに似ていますが、広がるにつれて大きな赤褐色になり、数日で手足の先までほぼ全身に広がります。その間高熱が続き、食欲が非常に落ちます。熱が下がると共に発疹は色あせて色素沈着を残し、発病から2週間くらいで消えます。発疹が出る前のかぜ症状の時間が最もうつしやすく、発疹が出てから数日までうつす可能性があります。

食欲が非常に落ちますので食餌がとれなくても水分は十分とるようにして下さい。高熱が続きますがからだの正常な反応であり仕方のないことで、解熱剤を使うことはかまいません。非常に体力を消耗しますから、いろいろな病気への抵抗力が落ちます。合併症は多く、薬をのんでいても完全に防ぐことはできません。気管支炎や中耳炎をおこすこともありますし、肺炎や脳炎になることもあります。発疹が出て4日以上たっても熱が下がらなかつたり、眠れないほど咳がひどい、耳だれが出る、耳をしきりに気にする、うとうとして意識がはっきりしないなどの症状がみられたら要注意です。麻疹脳炎は、麻疹自体が治ったと思われても数週間後におきることもあります。突然の高熱・意識混濁・けいれんで発病し、後遺症を残すこともあります。

病院では二次感染予防に抗生剤を処方します。解熱剤以外には咳止めなどもお出しします。

経過が順調でも、熱が下がって1週間くらいはできるだけ安静に生活します。また回復直後の1ヶ月間はかぜの感染を防ぐために、人ごみへの外出をさけ、旅行なども控えます。感染力が強いため、うつす期間は他の子供に接触させないことも大切です。予防としては生ワクチンの予防接種が有効です。日本では以前は一度の注射で良いとされていましたが、今回の大流行の原因が免疫力の低下が原因ということが判明したため、二度の注射が必要ということになりました。生後6ヶ月ごろまでは母体からの免疫が残っていますが、その後にしだいに弱くなり、だいたい10ヶ月から1歳にかけて免疫が切れます。1歳前にも麻疹に自然感染することがありますが、この時には熱があまり高くないとか、発疹の出方が少ないなど、比較的軽くすむことがあります。これは先天免疫が残っていたために、はしかの症状が弱められたからです。しかし早く免疫が切れていると、1歳前でも症状が強くなる場合がありますので、1歳を過ぎたら早めに予防接種の1回目を受けるようにして下さい。

予防接種の2回目は小学校入学前の1年間に受けますが、2回目の定期接種が始まったのは07年からです。2回目の注射を受けていない小学校2年生以上のお子さんは、中学1年生の時あるいは高校3年生の時に2回目の接種を受けられるようになりました(08年から5年間だけ)。この病気は天然痘と同じように撲滅することが可能なものの一つです。今回の大流行で日本は麻疹輸出国と世界から危険視されてしまいました。うっかり注射を受けそくなって、自然感染から合併症をおこしてしまったら本当に残念なことです。市町村からの通知を確認して忘れずに予防接種を受けて下さい。

感染が疑われる時にはガンマグロブリンの注射をすると感染して1週間以内ならば軽い症状ですませられる場合があります。まだかかっていないご兄弟がいて、予防接種をすませていなければ、是非ガンマグロブリンをおすすめします。ただし予防接種の代わりにはなりませんので、もし感染しなかった場合には1ヶ月以上たってからの予防接種を受けるべきです。

(19)風疹 (ふうしん)

三日ばしかと言われますが、はしかとは全く関係がありません。昔は4～7歳が多くかかっており、近年は感染者は少なくなりましたが、2012年は急に感染者が増えて、20～30歳代男性が半数近くを占めていました。この年代の男性は風疹ワクチンを受けていないことによるものと考えられています。

風疹ウイルスの飛沫感染によっておきます。潜伏期は14～21日です。感染力はあまり強くありません。たいていは発疹が出て感染に気づきます。熱が出るのは半数以下で、せいぜい37～38度とあまり高くなりません。年長児ほど発熱する場合があります。発疹は顔から始まり、すぐ全身に広がります。鼻水や咳などの症状が軽くあり、後頭部のリンパ節が腫れるのが特徴です。また他のリンパ節も腫れて痛がるかもしれません。熱は2～3日すれば下がり、発疹も数日で消え、登園(校)できます。

病院では解熱剤や痛み止めをお出しします。

妊娠初期にかかると胎児に奇形が発生する確率が高くなります。これを先天性風疹症候群と呼び、心臓病・白内障・難聴などの異常がでます。風疹にかかったか不明で、妊娠の予定があれば抗体検査を行い、抗体価が低い場合には予防接種をしておくべきです。

(20) 尿路感染症

熱しか出ないで咳・鼻水などのかぜの症状がない時には尿路感染症の疑いがあります。大人の尿路感染症では膀胱炎ならば頻尿・排尿時痛・血尿、腎盂炎ならば発熱・腰痛などの症状がみられるので、尿路系の病気の診断がつけやすいのですが、小児ではそのような症状を示すことはむしろ例外であり、尿を調べて初めてわかることの方が多いのです。小児では膀胱や腎盂に病気が限局していることは少なく、腎盂・尿管・膀胱・尿道の全てに広がっており、これらの部位をまとめて尿路と呼ぶので「尿路感染症」の病名を使います。腹痛の原因が尿路感染症のこともしばしばあります。この場合にも尿を調べないとわかりません。

2歳以下のおむつをしている子に多くみられますが、それ以上の小児にもおきます。女兒は外陰部が汚れやすく尿道が短いので、男児より感染しやすくなります。大部分は大腸菌の感染で、菌が尿道から侵入して発病します。

たいていは発熱で始まり、熱が上がったり下がったりでなかなか正常化しません。機嫌が悪くだるそうで、食欲低下・嘔吐・下痢などを伴うこともあります。検尿をしないとかぜと診断される場合がほとんどです。

病院では細菌に対して有効と考えられる抗生物質をお出しします。きちんとのませて下さい。水分を多めにとると尿路内の細菌を洗い流すことができます。排便後にお尻を後ろから前にふくと、女の子の場合、便が尿道口までできてしまい感染の原因となります。お尻のふき方を教えてあげて下さい。尿が膀胱にたまっている時間が長いと細菌が増えます。尿意を感じたらすぐに排尿する習慣をつけさせて下さい。

熱などの症状がなくなれば診察なしで尿をみるだけで感染の治りぐあいを判断できます。次の要領で尿をとり、窓口にお出し下さい。

尿のとり方

できれば朝の起きだちにとります。排尿のコントロールができるお子さんなら尿の出始めは捨て、中間のものをとるのが検査の上は理想的です。お渡しした容器の半分まで入れて下さい。来院されるまでに時間がかかる場合には冷蔵庫に保管しておいて下さい。排尿を教えられないお子さんには採尿バッグ（ビニール製の袋）をお渡しします。お持ち頂いた尿は顕微鏡検査に出しますので、結果は1日後になります。お電話頂ければ結果をお伝えします。

上記の治療をしてもすっきり治らなかつたり、再発を繰り返す場合には尿路系の検査が必要です。主にレントゲンの造影検査ですが、大きな病院でなければできませんので、専門医をご紹介します。検査で尿路系の奇形が見つかることもあります。

(21) 亀頭包皮炎

男児はほぼ全員が包茎であるために包皮と亀頭の間細菌がついたごみがたまって炎症をおこします。

おちんちんの先が赤く腫れて、膿が出たり、おしっこの時に痛がります。おむつやパンツに血液や黄色い膿がつきます。

病院では抗生剤のみ薬や軟膏をお出しします。ご家族が包皮をむいて亀頭を洗えるように指導します。包茎が原因で何度も炎症を繰り返す時には、包茎を手術することもあります。

(22)川崎病（皮膚粘膜リンパ節症候群）

4歳以下の乳幼児に好発する原因不明の血管炎をおこす病気です。日本の川崎富作博士が発見したため、川崎病と名前がつけました。

最初の段階では特徴のある症状（以下の6症状）が出ませんので普通のかぜと区別が付きません。

3～4日以上熱が下がらない場合には考えなければいけない病気の一つです。

- 1) 5日以上続く発熱
- 2) 手足の背部の腫れ、手のひら・足の裏の赤み
- 3) からだに不定形の発疹
- 4) 目（結膜）の充血
- 5) 唇の赤み、舌の赤ただれ（いちご舌）
- 6) 頸部リンパ節腫大

以上の内、1)を必須として5つあてはまればこの病気と診断します。この病気のこわいところは、心臓の冠動脈に瘤ができて突然死をおこしたりすることがあることです。病気が治った後にも定期的な心臓超音波検査が必要になります。

この病気とわかれば入院治療が必要なので、大きな病院を紹介します。ガンマグロブリンなどの薬の点滴を行います。

(23)ぎょう虫症

ぎょう虫は世界的に多くの人々が感染している寄生虫で、文明国や発展途上国の別なく広がっています。わが国でもしだいに減少しているかにみえますが、いまだに人口の5%台が卵を持っており、集団生活の中でうつります。ぎょう虫の成虫は8～10mmの木綿糸ほどの細く白い虫です。

5歳頃に多くみられ、また30～40歳台に多くなります。前者の5歳は子供どうしの接触が増える幼稚園・保育園年長組と小学校低学年、後者はその両親の年齢層であり、子供が家族内感染をもたらすことを意味します。

眠って肛門括約筋がゆるむと、ぎょう虫の雌は肛門からはい出して卵を産みます。この時の刺激で肛門周囲にかゆみをおぼえ、無意識にかいてしまうので、指先や爪の間に虫卵がくっつきます。そして手から口へと虫卵は私達の体内に入り、腸で成虫になります。下着についたり布団や床に落ちて同居家族の口からとり入れられ、家族全員に感染していきます。

小学校では毎年検査を行って感染者を見つけます。検査はお子さんの起きがけに、粘着性のセロファンを肛門に押し付けて卵を付着させたものを、検査センターに出します。セロファンはクリニックにおいてあります。

卵が見つければ感染していることは間違いありませんので、早急に治療します。コンバントリンという駆除薬を使い、家族全員で同時にのみます。

